

槐

かい

平成28年12月号

岡井省二創刊



平成二十八年十一月一日発行 第二十六巻第十号 通巻第三〇六号（毎月二回一日発行）
平成二十九年十一月第一日第三十巻第十号

竹伐れば

高橋将夫

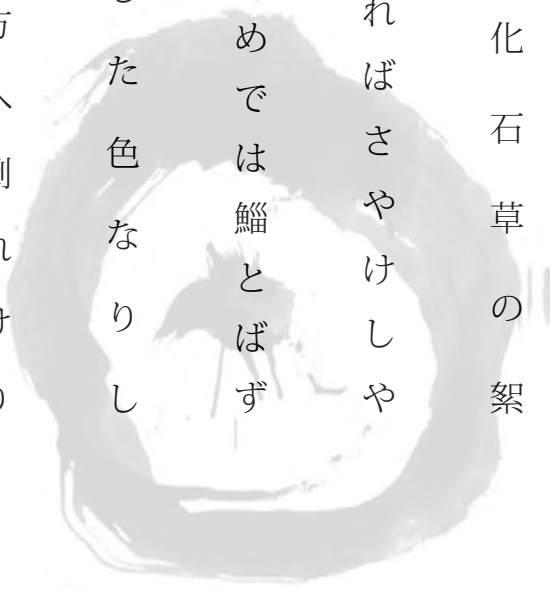
竹伐つて倒れるまでの一呼吸

秋の雨初めは音のなかりけり

秋天は水を弾いてしまひさう

鹿火屋守命をかけて闇守る

自らの色に酔ひたる酔芙蓉
海原の乾いてゐたる原爆忌
恐竜の羽毛の化石草の絮
譲り合ふ気持があればさやけしや
あれも駄目これもだめでは鯯とぼず
秋簾務め果たした色なりし
竹伐れば未来の方へ倒れけり



槐安集

水野恒彦

月欠ける音して銀杏黄落す
鶴来る雲のかがやくわたつうみ
梅の木に木霊のあそぶ白露かな
露けしや向ひの谿の能舞台
神鏡の裏は荒ぶる真葛原

加藤みき

一滴の水に宿りし秋灯
胸もとの勲章なりき草虱
一皮も二皮も剥け秋天へ
耳鳴りを押しのかちろちろ虫
かりがねやたん瘤などは気にするな

中島陽華

省二忌のことばするりと心太
鬼やんまそのひた向きの宙がへり
深吉野よ鮎の半なれ寿司の香よ
一文字懸崖づくりの菊なれば
残暑かな妣の縮衣の褪せもせず

竹内悦子

いきなりの雀飛び出す酔芙蓉
稲の香を纏うてをりし桜の木
衣被齒に衣着せぬ丸まろさかな
蟻塚の連なる土堀いなつるび
澄む水にうつす顔省二の忌



雨村敏子

シヤガールの風の音する白芙蓉
底紅や唐天竺に水流る
満天の星廻り出す茸山
月涼し仏頭ならぶその上に
雁や夜ふかぶかと青かりし

本多俊子

黄落の水たつぷりと墳墓かな
渾身といふ眩しさや雲の峰
花野より花野へおぼれりたりけり
天地あめつちの声の集まる曼珠沙華
語りかけるやうな風吹く秋海棠

近藤喜子

かりがねの声いにしへを曳きてくる
籠のぼつた帰心の翅の光りぬる
火柱の鶏頭に弾力の空
たつぷりと光陰を抱き芒原
身の白みつつ鈴虫に寝落ちけり

瀬川公馨

死人花の緋文字が乱舞してゐたり
秋さづい黄金の粒を残さむと
和太鼓のおとに桐の実弾秋とづい||秋の長雨けたる
無一物無尽蔵なり夕立あと
流星のちぢめてゐたり彼我の時

久保東海司

朝顔の咲く庭に干す鶉装束
目まとひの眼鏡掛けても外しても
雲海をどこの空とも知らず飛ぶ
洗硯やはじめは固き小筆の穂
蟬の穴意外に固き地に多し

柳川 晋

星飛ぶや天空をフリークライム
ネアンデルタールの鼻梁いなるび
雲の襦袢すらりと脱ぎて秋の空
仏滅の次に大安良夜かな
本願は絶対他力ばつたんこ

熊川暁子

新調の青空を着てかかしかな
舫ひ綱ゆるめば締る秋の風
とんぼうの軌跡を追へば青になる
山鳩は月の卵を生み置きぬ
淡海航く振る手九月の風となり

寺田すず江

足跡を消しゆく波の厄日かな
秋澄むや影を曳きたる濡標
天上の青吹かれゐる真葛原
鍵を打つ指軽ろやかに小鳥来る
忘れたきことのありけり穴まどひ

岩下芳子

京へ行く風に乗りたる秋の雲
深く飲んで熱く語りし夜長かな
透明な夜空となりし台風過
三井寺の風の声聴く無月かな
邯鄲の王国なりし夜の城

近藤紀子

朝まだき秋入梅の気を頬にうく
稲積島と聞くや答へし日焼の子
桜耳の猫ゐるキャンパス晩夏光
蟬しぐれに五体包まる砦あと
読みかけの本に菊の葉はさみたり

岩月優美子

爽涼の風は親しきものを呼ぶ
忘れたき事置きに行く花野かな
この辺り私の居場所地虫鳴く
黍嵐この世の憂さを嘗めて行く
コスモスの群生穢れなき風に

竹中一花

金星の森青かりき鹿ぞ鳴く
蒼天の点になりたる青鷹
教会の森に紅茸獣道
法の山越えて白鳥夜を渡る
文化の日さても南京玉簾

前田美恵子

興亡の証残れる草の花
秋風の通り抜けたる草書体
対岸の煙真直ぐや秋麗
草千里呑み込まむとす翳雲
長月の夜話いよよ艶めける

中田禎子

色鳥やがらがらぼんに先託す
糸鋸の丸みやはらか稲雀
蝦夷鹿の鋭き眼山深し
歩むたび鍵の鈴鳴る大花野
無花果やエデンは白き闇の中



槐市集

後藤マツエ

柴田靖子



秋 霖 や 夫 と 東 京 物 語

白萩のバケツいつばいでも淋し
天高しのぼる鳶の輪富^ふ土山^じを見て
秋一日マヤ文明に魅せられて
海がまだ燃えているなり秋夕やけ

法師蟬遠き木に鳴きはたと消ゆ

きはちすの白きは淋しなつかしき
鶏頭や燃えざりし日の遂になし
闇すきとほす邯鄲を聴きぬたる
とんぼうやただ空にゐて何を見し

阪倉孝子

庄司久美子

秋天へ天馬の手綱さばきける
空澄みて水より昏れる河童橋
月光の抱く裸婦像ときめきぬ
どんぐりとゆつくり行こう坂半ば
花豆をふつくら煮るや秋思ふ

石津瓦の山里よ小鳥来る
秋の雲幼子汽車に手を振りて
赤えんば中州の草の起き上がる
初秋の胸の高さのモロヘイヤ
雲梯の男の子の動き秋日和

杉原ツタ子

勾玉の曲り具合や鯛雲
懐に涼風はあり人送る
実石榴の爆けはじむや子等のこゑ
重陽の生駒連峰歌はずむ
声明や萩のほころぶ石畳

高野昌代

神無月あけて二十五周記念の会
マネキンの素肌にとふ秋の風
秋風鈴余計な風のなせる音
ポストへと名月連れて四五十歩
仁王の木の実降らしむ大囃

竹村 淳

桃の実の触れるを拒む色香かな
河内野やネオンの果ての淀花火
諾なひきボイン名付けの巨泉逝く
秋風やそれを言つちや寅旅へ
静謐に瀬戸の夕陽や晩夏光

田中信行

四年後の五輪を想ひ秋立ちぬ
祭終へ一番列車発車ベル
坂下る胡弓の調べ秋夜風
目を閉ぢて虫の音を聞く湯舟かな
万国のカレーを語る秋暑し

時 澤 藍

一息を入れて気付きし虫時雨
ぽかぽかの匂ひほのかや干し布団
解熱して身に染み渡る秋の水
秋の陽の長く伸びたるヨガマット
見くびりし残暑を癒す百日草

中 貞 子

園児みな揃ひの帽子衣被
迦陵頻伽の影おおきかり秋の雲
捨案山子まとめて置かれ日の落つる
柿たはは藁葺屋根の葺替中
曼珠沙華うしろにありし闇夜かな

槐集

高橋将夫選

魅了する台風の目のやうなひと 大阪 江島 照美

いじめられ愛されてゐる猫じやらし
長き夜の闇は光を包み込む
常識も非常識でもちんちろりん
末枯れは生きた証よ水鏡
月光やガラスの卵孵化しさう

有松 洋子

秋天を敲けばひびく鈴の音
秋茜寺のちひさな池に産む
何か足らぬ匂に木犀の香をもらふ
一ト夏の記憶消し去り蛇穴へ
今生や泣いて笑うて虹渡る
人間の温もりに来て秋の蝶
天上の永久の火盗み葉鶏頭
かまつかや触れなばこの身石になる
こぼれ萩ぢぢとばばとが清めたり

竹原 久保 夢女

一日を旅と思へり秋の暮 大阪 藤田美耶子

水海月踊り続けるバレリーナ
空蟬と落蟬並ぶ古城址
大花野に流るる生と死の Rond
萎れつつ色深めたり牽牛花
鬼やんま山より来たる過客にて

岡崎 犬塚李里子

野分雲眠りを誘ふ夜想曲
盆の月うすもの纏ひゆらめけり
秋薔薇や身をよせて吸ふエスプリ
秋茜ぶつかりさうな虚空かな
胸中のぼんのう放つ大花野
露の夜の遠ききら星父なるか
一日の風染めわけて酔芙蓉
睡蓮の水に秘したきことあり
烏瓜宙へ自尊の朱を吊す

吉田 順子

銀河往来

高橋将夫

◆槐集観照

魅了する台風の目のやうなひと 江島 照美

「台風目のような人」とはどんな人なのだろうか。台風ではなくて、台風目ののである。台風の目は無風で静かだが、周りは暴風雨。静と動の二面性が魅力なのかもしれない。

〈いじめられ愛されてゐる猫じやらし〉の句にも、好きな子だからこそ、いじわるしたくなるという二面性がある。〈常識も非常識でもちんちろりん〉の句も常識と非常識の二面性がある。それを「ちんちろりん」といなししているところが面白。

〈未枯れは生きた証よ水鏡〉は、しみじみと鏡に見入る自分を想像させる。〈長き夜の闇は光を包み込む〉は作者らしい感性の一句。

月光やガラスの卵孵化しさう 有松 洋子

月光には美しさだけでなく、妖しさもある。かぐや姫の童話の世界に対し、月夜に変身する狼男の世界もある。そんな月光だから、月夜に亀の卵が孵化するようにガラスの卵も孵化するかもしれない。

〈秋天を敲けばびびく鈴の音〉の感性は作者ならではのもので、秋天の本質に迫っている。秋天を敲けば鈴の音がするようないかにさせられる。

〈何か足らぬ句に木犀の香をもらふ〉、「木犀の香」で、きつとよい句になったことと思う。

今生や泣いて笑うて虹渡る 久保 夢女

人生は確かに涙と笑いだと思う。そして夢もある。作者らしい表現で人生がかるやかに詠まれている。

〈天上の永久の火盗み葉鶏頭〉と〈かまつかや触れなばこの身石になる〉の句、「葉鶏頭は天上の永久の火を盗んだもの」だという発想がユニーク。そんな恐い火だから「触れたら石になる」というのも納得。

〈人間の温もりに来て秋の蝶〉、人間は恐い存在でなく、ぬくもりを感じる存在だという。いかにも作者らしいぬくもりのある一句。

大花野に流るる生と死のロンド 藤田美耶子

まるで美しいバイオリン協奏曲を聞くような一句。美しいだけでなく、花野の本質に迫っている。花野は生と死のロンドなのだ。ちなみに、ロンドは輪舞曲。

〈水海月踊り続けるバレリーナ〉も海月が美しく表現されている。生涯踊り続けるのだ。

〈一日を旅と思へり秋の暮〉、〈空蟬と落蟬並ぶ古城址〉、〈萎れつつ色深めたり牽牛花〉、どの句にも作者ならではの思いが込められ、深さと広がりを感じられる。

秋茜ぶつかりさうな虚空かな 犬塚李里子

虚空は何もない空間なのに、赤とんぼがぶつかりそうだという。何かにぶつかるのではないかと心配する作者の気持の現れなのかもしれない。ところで、真空には何もないのだろうか。真空から素粒子が生まれ、ぶつかれば消えて元の真空に戻る。真空には素粒子を生む何かがあるのかもしれない。〈以下略〉